こいけものがたり

善三郎翁記

(十四) 富山商業学校時代(上)

木材の在庫品棚卸残材整理と、北島大工の小僧・職人達の冬仕事を利用して、祖父の指図に依り、神通町に貸住宅十五、六軒位建造し、外に桜町で当時貸家所有軒数富山市一番と称せられていた、三番町の三井治平氏から買い取り、祖父の指図により、大修理を施し所有した貸家二十四、五軒と合わせて四十軒余あった。毎月、家賃の集金を良一兄が担当していたが明治大学入学の為上京後は、私が担当するように、父から命じられた。私が、商業学校へ入学して間もない頃であった。

当時富山市では、市民の持家率は十%～二十%位、と称せられる時代であった。貸家は、不動産収入としては、確実な、高収益の投資物件でもあった。一寸した小金持階層は、夫々に数軒、十数軒と所有していた。当時は、現在のような借人に有利な借地・借家法の無い時代であった。

労働運動は、未だ幼稚な時代でわずかに、労農党の大山郁夫氏・阿部磯雄氏・河上京都帝大教授等は、「家賃・農業小作料等、不労所得層を無くせよ。」「働かざる者、食うべからず」と、空念仏の様に言っている程度で、実力の伴わない社会主義主張の程度の時勢であった。

勿論、現在のように、健康保険・国民保険・厚生年金・労災保険等各種社会保険制度が未だ行き届いていない時代であった。風邪をひいて休む、病を得て就業不能になる、すると医療費・看護費用等の支払いが増えるが、勤務先が欠勤になるから、反って収入が減る訳である。私は、学校から帰宅後指定日に家賃を集金に行くと或る借家人が、「大切な働き手が、今月は病気で休んだので、収入が減ったから待って下さい。」と頼む。次の月もとなると、滞納家賃が累積するばかりである。家に帰り父に、滞納家賃の顛末を報告すると、「馬鹿野郎、そこを、どう上手に集金するかが、お前の能力の問題である。私の家は、社会事業・慈善事業で企業経営しているのでは無い。」と。

借家人の所へ行くと、本当に病気で休んでいる様にも思える。医者も往診している様に思える。借家人は、「坊ちゃんの家庭は、私達の家賃の一ヶ月、二ヶ月の家賃収入が無くても、生活には困らないでしょう。私の家庭は、家賃を払うと明日から生活が出来ないのです。坊ちゃんから、お祖父さん・お父さんによく頼んで下さい。」と、頭を深々と下げられると、全く弱かった。よく双方の板挟みに在って困った事を覚えている。父からの入知恵と、私の体験が積み重なって来ると、大体滞納家賃の常習犯組と、真面目な人で本当に一時的に困った人達との区別が判る様になった。私は、家賃の集金の責任を負わせられた事により社会学の経験と勉強を体得した。

商業学校三年生の頃、小原律枝(男性・高知県出身)と言う先生が赴任されてきた。京都帝国大学経済学部卒業の学士様で、当時有名な河上肇京大教授のゼミ出身とかのふれ込みであった。当時は田舎の商業学校の先生達は、富山師範学校卒業の小学校の先生の中から、検定を通過した程度の老人の先生達が大部分で、小原先生は、若さ・出身校からして全くの特異の存在であった。新婚早々の若い先生だったので、私達生徒達にも魅力があった。経済学を担当された。四年生から卒業迄、経済学を学んだ。五年生になると、経済学も近代史に入り、近世社会学がだんだん加わり、社会主義・共産主義的講義が続いた。制定された教科書には全然触れず、大学生の様に、先生の講義を生徒達が自分の思考でノートするだけであった。それが又、私達の魅力の一つでもあった。一通りの授業が済むと、これ以上は思想問題になるので、教師として教壇で講義する事が出来ない。より以上思想的な分野に迄講義を受けたい者は、私の自宅へ来なさいと言うので、五福の先生の自宅へ、度々、私も土、日曜日に通った事を覚えている。

一、英国に於てワット氏の蒸気機関の発明により、第一次産業革命が起こる。一、その結果、重農主義から重商主義に移行し、資本主義経済が発達する。一、一般社会秩序が根底から崩れ、資本主義に対抗して、社会主義、共産主義経済思想が発展して来る。一、アダムスミス氏著「富国論」から端を発し、マルクス氏・エンゲルス氏の唯物史観的マルキシズムの共産主義論。一、レーニン氏・スターリン氏が、帝政ロシア政府を倒し、共産主義国家を創立する。一、コミンテルン(第三インターナシュナル)イズムが、世界中に蔓延しつつあること。一、これからの世界は、資本主義国家が崩壊し、共産主義国家が世界を支配する様な時勢に変わって行くこと。一、河上肇博士著「貧乏物語」の講義。一、修正資本主義論の台頭等。一説には、小原先生は、京大を卒業していながら、こんな田舎の商業学校に奉職する人では無いのだが、当時大変うるさかった日本共産党弾圧を逃れて田舎に来て地下に潜っているのだと言う風評もあった。しかし、事の真相はとにかく、私達血気にはやる青年達には充分魅入せられるものがあった。

私は、昭和三十年に、ソ連材の初輸入を行った。勿論、商売として行った訳だが、反面、学生時代に習った共産主義国家に対しひそかに関心もあった。ソ連の共産党とはどんなものか。さぞかし学生時代に習った、甘い夢のような、「ユートピア社会の国家」と想像していた。以来今日まで、三回訪ソし、或は毎月入船する船員と交際して、現実に彼等の生活程度や全く自由の無い社会政治体制を見て、失望した。理想と現実とでは、大変な違いである。その昔教鞭を取っていた小原先生の顔がよく思い出された。先生は、私が卒業後暫くして、亡くなられたとの事であった。